

「旧約の信仰者たちの手本」 預言者エレミヤ① (11:35~39)

女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。

またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、**あざけられ、むちで打たれ**、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、
—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした— 荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

(11:35~39)

■はじめに

1. 手紙の背景と 11 章の内容

- (1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

2. 前回までの流れ

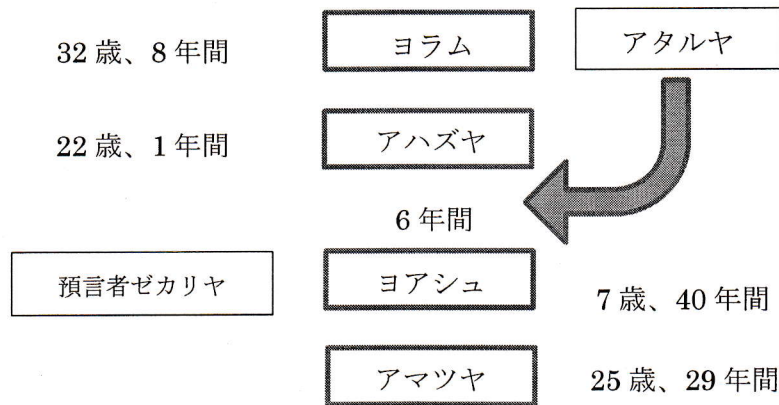
- (1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。
 1. 二人とも信仰によって「剣の刃をのがれ」た（ヘブル 11:34）。
 2. 35 節「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました」とあるのは、エリヤ（Ⅰ列 17:17~24）とエリシャ（Ⅱ列 4:18~37）による事例
 3. 37 節「羊ややぎの皮を着て歩き回り」とあるのは、エリヤ（Ⅱ列 1:8）
- (2) 本日は、南王国の歴史の 5 回目

■ 南王国の第1回：分裂後の4人の王 BC930~846

	レハブアム	41歳、17年間
	アビヤム	3年間
最後の2年間は病気	アサ	41年間
治世は37歳から23年	ヨシャパテ	35歳、25年間

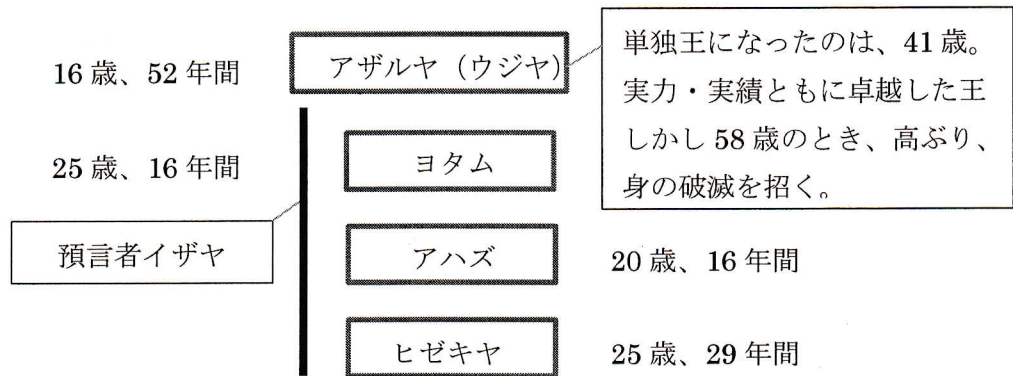
1. アサ王は、「アサの心は一生涯、主と全く同じになっていた」（I列 15:14）
 - (1) アサは、信仰を通して神の恵みにより霊的救いを受けた信者である。
 - (2) しかし、晩年、彼を戒めた預言者を足かせにかけ、民のうちのある者を踏みにじった。その3年後、彼は両足とも病気になり、その病は重かった。
 - (3) ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者を求めた。発病から2年後に、彼は死んだ。
 - (4) 信者が神の警告を無視して罪を犯し続けると、霊的救いは失わないが、肉体的裁きを受けることがある（ヘブル 10:26~27、Iコリ 5:5）
2. ヨシャパテ王は、信仰によって「他国の陣営を陥れた」（ヘブル 11:34）。
 - (1) しかし、この戦いが起きた原因は、ヨシャパテが誤った方向に行ったことに対する、主の警告であった。誤った方向とは、北王国イスラエルのアハブ王の娘アタルヤを、長男ヨラムの嫁に迎え入れたことである。
 - (2) その娘の母親、すなわちアハブの妻は、かのイゼベルである。
 - (3) 娘アタルヤは、バアル崇拝とともに母親の気質もしっかりと受け継いでいたようである。
3. 長男ヨラム以降の4代、南王国ユダは暗黒と混乱の時期を迎えることになる。

■ 南王国の第2回：分裂後では5番目から8番目の王 BC848~767



- ヨラムは、主を捨て偶像崇拜に走るとともに、兄弟を皆殺しにした。
 - その後、外敵の襲撃を受けて、残った息子はアハズヤだけとなった。
 - 彼自身は内臓の重い病気になって死んだ。
- アハズヤは、王となったその年、北で起きた謀反に巻き込まれて死んだ。
- 王母アタルヤは、北の実家が滅亡し、それに巻き込まれて息子アハズヤが死んだと知ると、ただちに、アハズヤの子たちを皆殺しにした。そのとき、赤子ひとりだけ助け出され、6年間神殿にかくまわれた。その子はヨアシュ。
- ヨアシュが7歳のとき、祭司エホヤダが親衛隊とともに立ち、王を自称していたアタルヤを倒して、王権を再びダビデの血筋であるヨアシュに戻した。
 - ヨアシュは、祭司エホヤダが死んだあと、民のつかさたちの要求を受け入れて偶像崇拜を認めてしまった。
 - 主は何人もの預言者を遣わして戒めたが、王も民も聞く耳を持たなかった。
 - 祭司エホヤダの子ゼカリヤが預言者として立って主のことばを語った。民は陰謀により王の命令を引き出し、ゼカリヤを神殿の庭で石打ちにして殺した。37節で「石で打たれ」と言われているのは、このゼカリヤである。
 - ゼカリヤが殺されたあと、アラムの少人数の軍勢によって南王国ユダは襲撃されて敗れ、ヨアシュはその責任を問われて裁判にかけられた。そのとき、すでにヨアシュは病床にあった。彼は病床で家来により殺された。
- 8番目のアマツヤは25歳で王となった。エドムとの戦いで1度勝ったことにおごり、29歳のとき、北のイスラエル王国に戦いを挑むも敗れ、捕虜になってしまった。このとき、その子アザルヤ16歳が代理王となるが、北イスラエルはアマツヤを王位に戻した。それから25年後、エルサレムの人々が謀反を起こし、逃げるアマツヤ54歳を追走、ラキシユで彼を殺した。

■ 南王国の第3・4回：分裂後では9番目から12番目の王 BC792~686

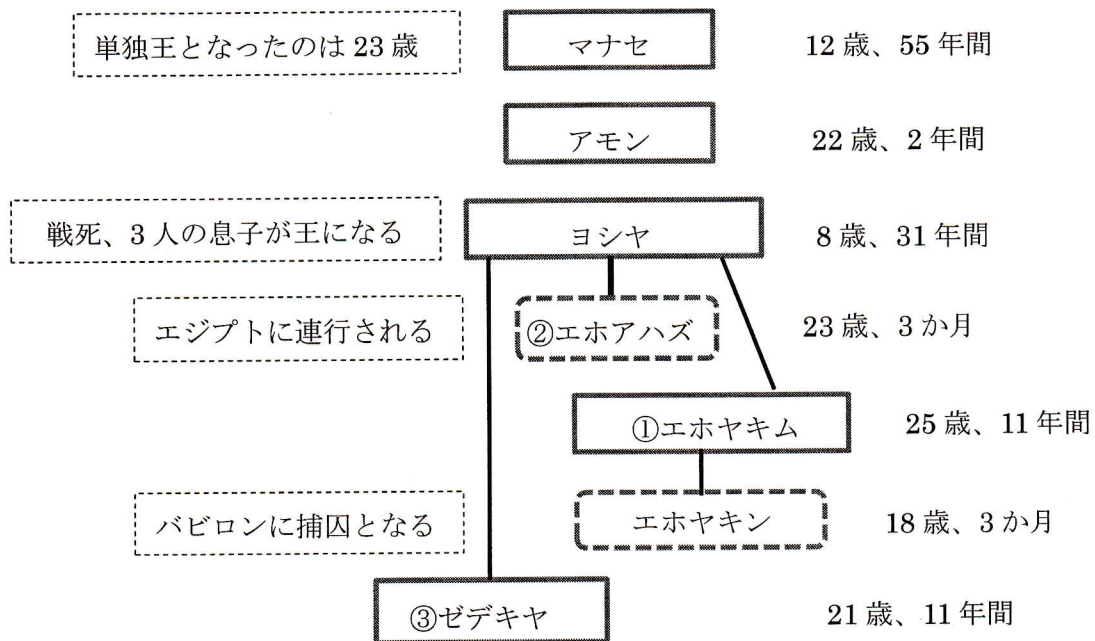


- この4人の王の時代に活動した預言者が、イザヤである (イザヤ1:1)。
 - 預言者としての召命は、「ウジヤ王が死んだ年」(イザヤ6:1)、よって紀元前740年。4人目の王ヒゼキヤが死んだのは紀元前686年。
 - よって、イザヤの活動期間は **54年** まさに、忍耐の年月である。
 - 伝承では、イザヤは12番目の王ヒゼキヤの次、13番目の王マナセによって「のこぎりで引かれ」(37節)た。イザヤがマナセ王のときに活動したとは記されていないので、イザヤの死は、ヒゼキヤ王が亡くなってすぐ、紀元前686年頃であると推定される。
- アハズ王20歳から24歳までの間で、大きな事件が起きた。
 - アラム(シリア)と北のイスラエルとが南のユダ王国を攻めた。
 - 預言者イザヤは、アハズに、「恐れるな。アラムとイスラエルは、私の幼な子が善悪の判断ができるような年齢に達する前に、アッシリヤによって滅ぼされる」と預言した。
 - しかし、アハズはこの約束を信頼せず、金銀をアッシリヤ王に贈って助けを求めた。アッシリヤ王はアラム軍を破り、アラムの首都ダマスコを占領した。
 - アハズはダマスコまで行って、アッシリヤ王に謁見した。そのとき、アラムやアッシリヤが用いる祭壇の図面と模型を入手し、エルサレムの神殿の前に同じものを造らせた。神殿域も改造して、アッシリヤ王が通れるようにした。
 - そこまでしてアッシリヤとの友好関係を築こうとしたが、アッシリヤ側はユダ王国を苦しめた。にもかかわらず、ますますアハズはアラムやアッシリヤが信奉する神々に犠牲をささげた。イスラエルの神よりも強いと信じたからであった。
- アハズ王28歳のときに、北のイスラエルがアッシリヤによって破られ、首都サマリヤは陥落した。アハズはますます、アラムやアッシリヤの神々に仕え、36歳で死ぬまで背教を続けた。神殿の玄関の戸を閉じ、祭司たちが中に入れないようにしたので、神殿の七枝の燭台から、ともしびが消え、香の祭壇で香がたかれることもなかった。
- アハズ王が亡くなった年の翌年、紀元前714年にその子ヒゼキヤ25歳による治世が開始した。

- (1) ヒゼキヤは10代で共同王に指名されていて、父アハズのそば近くで、アラムと北イスラエルの滅亡、アッシリヤからの圧迫、そして父アハズの背教を見てきた。
 - (2) ヒゼキヤがその治世の最初に行ったことは、神殿の玄関の戸を修理してこれを開いたこと。そして、神殿と祭司たちを清め、過越の祭りを1ヶ月遅れではあったが挙行した。
5. ヒゼキヤ王の治世第14年、紀元前701年に大きな事件が起きた。ヒゼキヤ38歳。
- (1) アッシリヤがついに南王国ユダへ総攻撃をかけた。
 - (2) 先遣隊は、サマリヤを南下して北からエルサレムに迫った。
 - (3) 本隊は、地中海沿いに南下して、エルサレムの西側の町々を攻略しながら、南王国ユダの国土を制圧していった。この間、ヒゼキヤの要請を受けたエジプト軍がアッシリヤ軍と戦ったが敗退した。
 - (4) ヒゼキヤはアッシリヤに講和を求めたが、差し出した金銀が不足であったため、アッシリヤ王は、講和ではなく降伏を要求し、数名の幹部に大軍を率いさせて、エルサレムを包囲した。
 - (5) アッシリヤ側は、降伏勧告の中で、主を冒瀆した。
 - (6) 預言者イザヤは、「アッシリヤはエルサレムに入ることはできず、来た道をまた戻る」と預言した。その夜、主の使いがアッシリヤの陣営で、18万5千人を打ち殺した。
 - (7) アッシリヤ王セナケリブは立ち去り、ニネベへ帰った。彼がその神ニスロクの宮で拝んでいたとき、彼の子のうちの二人が剣で彼を打ち殺した。
6. 周辺諸国はヒゼキヤを尊敬して、彼に贈り物をした。それが彼の高ぶりにつながった。
- (1) その同じ年に、ヒゼキヤは病気になって死にかかった。
 - (2) 預言者イザヤを通していったん死を告げられるが、ヒゼキヤが主に願い求めたので、再度イザヤを通して「あなたの寿命にもう15年を加える」と約束され、そのしるしとして日時計が10度戻るという奇跡を見せられ、彼は重病から癒された。
 - (3) このあと、彼は、病気からいやして下さった主の恵みにしたがって主に報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。
 - (4) そのころ、遠い小国であったバビロンの王が使者を遣わし、病気から癒えたヒゼキヤに贈り物をした。→ イザヤによる預言「アッシリヤではなく、このバビロンから攻撃を受ける」。
 - (5) 指導者の罪は、国民にも及ぶ。神の怒りが、彼の上に、そして国民の上にも下ろうとした。あらためてヒゼキヤと民が、その心の高ぶりを捨ててへりくだったので、主の怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった。
 - ① 預言者ミカ・・・イザヤと同時代に活動した預言者（ミカ1:1）
 - ② エルサレムが廃墟となるという預言（ミカ3:12）
 - ③ この預言を受けて、ヒゼキヤと民がへりくだった（エレ26:18~19）

- 本日の内容 南王国の13番目の王マナセから、最後の王ゼデキヤまで
- 1. マナセは、南王国ユダの王の中でも、ユダ王国滅亡の引き金となった人物と言われる(Ⅱ列 23:26~27、Ⅱ24:3~4)。しかし、晩年に「神の前に大いにへりくだって、神に祈った」。そして「マナセは、主こそ神であることを知った」(Ⅱ歴 33:12~13)と記録される信仰者となった。
- 2. 15番目のヨシヤの時代から最後の王ゼデキヤの時代に活動した預言者が、エレミヤである。ヘブル人への手紙では、「あざけられ、むちで打たれ」とある。紀元前627年から586年まで、51年間(エレ1:2~3)。

□ 南王国の13番目の王マナセから最後の王ゼデキヤまで BC697~586



丸数字は、ヨシヤ王の子たちの出生順
 点線で囲っている王は、王になって間もなく他国に連行された
 七人の王が立つが、世代としては実質的に4代である

- 1. マナセ (12歳、55年間) BC697 (12歳) ~686 (23歳) ~642 Ⅱ列 21:1~18
- (1) マナセは12歳で王となり、55年間王であった。
 - ① 後にエルサレムが陥落するのが紀元前586年。ここから逆算すると、マナセが12歳で王となったのは、紀元前697年頃。父王ヒゼキヤは42歳。
 - ② 父王ヒゼキヤが53歳で死去するのは、それから11年後の紀元前686年頃。
 - ③ よってマナセが12歳で王となったというのは、父ヒゼキヤ王42歳の共同王になったということ。アッシリヤ軍を跳ね返した大事件はヒゼキヤ38歳のときであるから、ヒゼキヤが高ぶっていたころと推定される。

- ④ ヒゼキヤが 53 歳で世を去ったとき、マナセは 23 歳。マナセが単独王となったこの年、彼は預言者イザヤをのこぎりで引いて殺した、と推定される。
- (2) マナセは、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民に忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行った。
- ① 彼は、父ヒゼキヤが打ちこわした高き所を築き直した。
 - ② バアルのために祭壇を立てた。
 - ③ イスラエルの王アハブがしたようにアシェラ像を造った。
 - ④ 天の万象を拝み、これに仕えた。彼は、かつて「エルサレムにわたしの名を置く」と言われた主の宮に、天の万象のために祭壇を築いた。
 - ⑤ 主の目の前に悪を行い、主の怒りを引き起こした。
 - 自分の子どもに火の中をくぐらせた（Ⅱ列 23:10 偶像モレクにささげる人身犠牲）
 - ト占をし、まじないをし、霊媒や口寄せをした。
 - ⑥ さらに彼は、自分が造ったアシェラの彫像を主の宮に安置した。
- (3) 主は、そのしもべ預言者たちによって、エルサレムとユダにわざわいをもたらすと告げられた。
- (4) マナセは、ユダに罪を犯させ、主の目の前に悪を行わせて、罪を犯したばかりでなく、罪のない者の血まで多量に流し、それがエルサレムの隅々に満ちるほどであった。
- (5) Ⅱ歴 33:10~20 マナセのへりくだり
- ① 主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうともしなかった。
 - ② そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕らえ、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。
 - ③ しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、神に祈った。
 - ④ 神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。
 - ⑤ こうして、マナセは主こそ神であることを知った。
 - ⑥ その後、彼はダビデの町に外側の城壁を築いた。そして、彼はすべてのユダの城壁のある町々に將校を置いた。
 - ⑦ 彼は、主の宮から、外国の神々と偶像、および、彼が主の宮のある山とエルサレムに築いたすべての祭壇を取り除いて、町の外に投げ捨てた。
 - ⑧ 主の祭壇を築き、その上で和解のいけにえと感謝のいけにえをささげ、ユダに命じてイスラエルの神、主に仕えさせた。
 - ⑨ しかし、民は、彼らの神、主にではあったが、高き所でなお、いけにえをささげていた。

2. アモン (22 歳、2 年間) BC642~640 II 列 21:19~26
- (1) アモンは父マナセが行ったように、主の目の前に悪を行った。彼は、父の歩んだすべての道に歩み、父が仕えた偶像に仕え、それらを拝み、彼の父祖の神、主を捨てて、主の道に歩もうとはしなかった。
 - (2) II 歴 33:23 彼はその父マナセがへりくだったようには、主の前にへりくだらず、かえって、彼アモンは罪過を大きくした。
 - (3) アモンの家来たちは彼に謀反を起こし、その宮殿の中で彼を殺した。
 - (4) しかし、民衆は、アモンに謀反を起こした者をみな、打ち殺した。
3. ヨシヤ (8 歳、31 年間) BC640~622~609 (39 歳) II 列 22:1~23:30
- (1) ヨシヤは主の目にかなうことを行って、先祖ダビデのすべての道に歩み、右にも左にもそれなかった。
 - (2) 22:3~23:25 治世第 18 年、紀元前 622 年頃、律法の発見と過越の祭り
 - ① 22:3~20 律法の書 (契約の書) が主の宮で発見される
 - ② 23:1~3 王は、ユダとエルサレムの長老たちを全員召集して、主の宮へ上り、契約の書のことばを読み聞かせ、主の前に契約を結んだ。
 - ③ 23:4~20 主の宮、エルサレム、ユダとサマリヤの町々から、偶像などをすべて排除した。
 - ④ 23:21~23 契約の書に記されているとおりに、主に過越のいけにえをささげた。(詳細は、II 歴 35:1~19)
 - ⑤ 23:34 霊媒、口寄せ、テラフィムなどを除去した。
 - ⑥ 23:25 ヨシヤのように心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くしてモーセのすべての律法に従って、主に立ち返った王は、彼の先にはいなかった。彼の後にも彼のような者はひとりも起こらなかった。
 - ⑦ 23:26~27 それにもかかわらず、マナセが主の怒りを引き起こしたあのいらだたしい行いのために、主はユダに向けて燃やされた激しい怒りを静めようとはされなかった。主は仰せられた。「わたしがイスラエルを移したと同じように、ユダもまた、わたしの前から移す。わたしが選んだこの町エルサレムも、わたしの名を置くと言ったこの宮も、わたしは退ける」
 - (3) 国際情勢が大きく動いた。
 - ① ヨシヤ王 36 歳のとき、アッシリヤの首都ニネベがバビロニアによって陥落した。紀元前 612 年。
 - ② エジプトでは、紀元前 610 年、ネコ 2 世がエジプト王パロに即位
 - (4) II 歴 35:20~24
 - ① 紀元前 609 年、台頭してきたバビロニアを抑えて、アッシリヤ地域を支配するため、エジプト王ネコが北上してくる。向かうは、ユーフラテス河畔のカルケミシュ。

- ② ヨシヤ王は、エジプト王を迎え撃とうとした。
- ③ ネコは彼のもとに使者を遣わして、「あなたを攻めに来たのではない。神は、早く行けと命じておられる。私とともにおられる神に逆らわずに控えていなさい。さもなければ、神があなたを滅ぼす。」と伝えた。
- ④ しかし、ヨシヤはパロから顔をそむけず、かえって彼と戦おうとして、変装し、神の御口から出たネコのことばを聞かなかった。そしてメギドの平地で戦うために行った。
- 変装は、エジプト軍の射手の攻撃が王である自分に集中しないようにするため
- ⑤ しかし、射手たちが放った矢が、ヨシヤに的中した。王は家来たちに「私を降ろしてくれ。傷を負ったのだ」と言った。そこで、家来たちは彼を戦車から降ろし、彼の持っていた第二の車に乗せて、彼をエルサレムに連れ帰った。彼は死んだ。
- ⑥ II列 23:29 には「パロ・ネコは彼を見つけてメギドで殺した」とあるので、戦場での動きから、変装していてもヨシヤ王であると見破られたものと推定される。
- (5) その後の国際情勢
- ① エジプト軍は、紀元前 605 年、カルケミシュでバビロニア軍と戦い、敗北した。エレミヤ 46:2~12 はその戦いの様子を記している。
- ② エレミヤ 46:13~24 は、エジプト本国がバビロニアによって征服されることについての預言である。

4. エホアハズ (23 歳、3 か月間) II列 23:31~34

- (1) ヨシヤの子。わずかな期間であるが「主の目の前に悪を行った」。
- (2) 33 節 エジプト王 (パロ) ネコは、彼をハマテの地のリブラに幽閉し、銀 100 タラントと金 1 タラントの科料を課した。ハマテの地とは、アラムのオロンテス川沿いの地域を指す。現在のシリアの町ハマーがある地域。
- (3) 34 節 ついでパロ・ネコは、ヨシヤの子エルヤキムをエホヤキムと改名したうえで、父ヨシヤに代えてユダの王とした。
- エルヤキム=神は確立する、エホヤキム=主は起こす
- (4) 34 節 エホアハズは、エジプトに連行され、エジプトで死んだ。別名シャルム (エレ 22:11)。エホアハズ=主は捕らえる、シャルム=報酬

5. エルヤキム→エホヤキム (25歳、11年間) BC609~598 II列 23:35~24:5
- (1) ヨシヤの子。エホアハズの兄。
 - (2) 銀と金をパロに贈った。パロの要求する量を与えるために、国民ひとりひとりに割り当てて取り立てた。
 - (3) 彼は、その先祖たちがしたとおりに、主の目の前に悪を行った。
 - (4) エジプト王の勢力が衰え、バビロンの王ネブカデネザルが攻め上ってきた。エホヤキム王は、3年間バビロンの属国となったが、その後、再びバビロンに反逆した。
 - ① II歴 36:6によると、バビロンの王ネブカデネザルが攻め上ってきたとき、エホヤキム王は青銅の足かせにつながれ、バビロンに引かれていった。そのとき、ネブカデネザルは主の宮の器具をバビロンに持ち去り、バビロンにある彼の宮殿に置いた。
 - ② ダニ 1:1~4 治世第3年、紀元前606年に包囲され、翌年の紀元前605年に **第1回捕囚**。このときダニエルたち、バビロンへ(のち、政府高官に)
 - ③ エホヤキム王はエルサレムに戻され、3年間バビロニアに従属した。しかし、その後、再びバビロニアに反逆した。
 - (5) そこで主は、カルデヤ、アラム、モアブ、アモン、それぞれの略奪隊を遣わしてエホヤキムを攻めた。ユダを主の前から除くということは、主の命令によること、マナセが犯したすべての罪のためであり、またマナセが流した罪のない者の血のためであった。
6. エホヤキン (18歳、3か月) II列 24:6~16, 25:27~30, エレ 22:24~30 「エコヌヤ」、マタイ 1:11~12 「エコニヤ」
- (1) エホヤキムの子=ヨシヤの孫。BC616生まれ。
 - (2) 9節 彼は、すべて先祖たちがしたとおりに、主の目の前に悪を行った。
 - (3) II歴 36:9~10
 - ① 彼は主の目の前に悪を行った。
 - ② 年が改まるに及んで、ネブカデネザル王は使者を遣わし、彼を主の宮にあった尊い器とともに、バビロンに連れていった。
 - (4) 10~16節 **第2回捕囚** 紀元前597年4月22日 このとき、祭司エゼキエルはバビロンへ(預言者としてバビロン捕囚の中で活動)
 - ① エホヤキン、王の母、王の妻たち、その宦官たち
 - ② すべての高官、すべての有力者1万人
 - ③ 職人、鍛冶屋もみな(千人)
 - ④ すべての兵士7千人、勇敢な戦士
 - ⑤ 貧しい民衆のほかは残されなかった
 - (5) 後日談: II列 25:27~30 エホヤキンは37年後に牢獄から釈放されて、バビロンの王と食卓を共にする待遇を受けるようになる。